

## 解説、編訳：徐玉諾の文学：序説：近代中国の 「怪」詩人

秋吉， 收  
九州大学大学院言語文化研究院国際文化共生学部門・国際文化学講座

<https://doi.org/10.15017/7153233>

---

出版情報：言語科学. 51, pp.77-88, 2016-03-31. 九州大学大学院言語文化研究院言語研究会  
バージョン：  
権利関係：

# 徐玉諾の文学

一序説：近代中国の「怪」詩人

秋吉 収（解説、編訳）

## はじめに

徐玉諾（1894-1958）、本名言信、字玉諾、河南省魯山県出身。貧しい農家の長男として生まれた彼は、幼時より文才を発揮し、1916年に河南第一師範入学、『新青年』等に触れて新思想、新文学の薫陶を受ける。1921年、郭紹虞の紹介により『晨报副刊』に第一作「良心」を発表。以後、同紙上に十数篇の郷土小説を続けざまに発表する。それら作品群は当時北京でやはり民間文学を模索していた魯迅の目にとまり、魯迅は孫伏園を介して徐玉諾に小説集出版を何度も勧めたようだ（拙稿『郷土文学』作家としての魯迅と徐玉諾【『中国文学論集』20号、1991】、同「魯迅編未刊『徐玉諾小説集』考【『九州中国学会報』30巻、1992】等参照）。その後、文学研究会の正式会員となった徐玉諾は機関誌『小説月報』を中心に約十篇の小説を集中的に発表。うち三篇は巻頭を飾っており、当時における彼の存在の大きさが窺われる。作品の内容はいずれも当時の悲惨な農村の情景を題材としたものであった。さらに、小説にもまして顕著なのが詩作方面の成就である。彼は早い時期から小詩や散文詩の創作に積極的に取り組み、個人詩集『将来之花園』及び、朱自清、周作人、鄭振鐸ら当時の文学研究会主要会員との合詩集『雪朝』（以上二冊いずれも【文学研究会叢書】、1922年、商務印書館）等の出版を含む400首に垂んとする詩作品も、極めて大きな影響を与えている（拙訳：葉聖陶著「玉諾的詩」【『中国文学評論』36号、2000】等参照）。散文詩集『野草』（1927）に代表される“詩人”魯迅もまた徐玉諾の詩に魅了された一人であった（拙稿「徐玉諾と魯迅—散文詩集『野草』をめぐって—」【『中国文学論集』21号、1992】参照）。彼が如何に注目されていたかは、当時の誌面を繙けば容易に了解されるが、創造社の成仿吾が特に文学研究会を始めとする既存の文壇に投げつけた挑戦状たる「詩之防禦戦」（1923年5月『創造週報』創刊号）にて、彼が胡適の『嘗試集』や康白情、兪平伯、謝冰心らと並べて徐玉諾も徹底的に否定していることも証左の一つに数えられよう。1935年に編まれた『中国新文学体系』（良友図書出版公司）の『小説一集』（茅盾編）、『詩集』（朱自清編）それぞれにおいても徐玉諾は高く評価されており、彼の影響力が一時的なものではなかったことが窺われる。

さらに近年の研究により、徐玉諾への注目、その影響が中国国内にとどまらず海外にまで及んでいたことが明らかになってきたことも興味深い。文芸研機関誌『野草』93号（2014.2）掲載の裴亮氏「響き合う詩心—留学時期草野心平の詩風と文学研究会詩人徐玉諾」における草野の初期詩作が徐玉諾の影響を受けたものであったとの発見は記憶に新しいが、そのほかに（手前味噌で恐縮ですが）、「台湾の魯迅」と称される著名作家頼和が徐玉諾の郷土小説作品を自作の下敷きに使用していた事実など（拙稿「頼和與徐玉諾—“臺灣的魯迅”與大陸新文學的關係」【『彰化文學大論述』、2007、台湾五南図書出版公司】参照）は、徐玉諾文学の広がりや深度という点からも

特筆されよう。

こうした徐玉諾が現代の文学史上さほど注目されないことには、複雑な背景、要因が考えられる。作家活動の点では、彼の活躍時期がほぼ 1921 年から 24 年までに限定されることや、周作人と親しい関係にあったこと（反対に魯迅とは微妙な関係にあったこと）。また抗日時期には国民党員として活動したことも何らかの影を落としているかもしれない。だが時代を経て、1987 年人民文学出版社による『徐玉諾詩文選』（劉濟猷編）の刊行等に状況の変化を跡付けることができよう。2008 年には徐玉諾学会の現会長たる平頂山学院教授秦方奇氏によって、散佚作品も可能な限り収集した『徐玉諾詩文輯存（上・下）』（開封：河南大学出版社）が出されることで、研究環境もかなり整備されてきた。

拙稿では、徐玉諾の作品を本格的に紹介する「序説」として、まずは拙訳にて幾つかの作品を紹介したい。今後、翻訳、研究を一層進めていく予定である。

## 1 徐玉諾の詩

### 「夜の声」

暗闇そして寂寞の夜の中、  
何も見ることはできない；  
ただ聞き取れるのは・・・殺せ殺せ殺せ・・・時代が命を喰らう響きだけ。

(1922 年 4 月 14 日夜)

### 「人与鬼」

人生とは幽霊の行く末、  
幽霊とは人生の行く末、  
人はいつも次のように言う、  
「死」とは恐るべき、悲しむべきもので、  
「幽霊」とは暗くて、気味が悪くて、とても耐え難い——  
そうした役回りなのだと。

.....

でも幽霊たちがこう言っていないとどうしてわかるだろう。

「生」とは恐るべき、悲しむべきもので、  
「人」とは暗くて、気味が悪くて、とても耐え難い——  
そうした役回りなのだと。

.....

死せる幽霊から生ける人まで、  
生ける人から死せる幽霊まで、

その間はたった一枚の薄い膜で隔てられるだけ——  
——それは幽霊と人の祖先が  
彼らの子供たちに伝えたもので、  
幽霊と人の子供たちが  
みな彼らの生を愛し、彼らの死を恐れるようにし向けたもの。  
これによって人と幽霊の行く末には  
最も大きく最も恐るべき悲しみが立ちはだかることになったのだ。

### 「かもめ」

この世界でみずから負担を軽くできるものは、  
かもめに勝るものはない。  
彼女はとても上手に両翼を合わせると、  
頭さえも片方の羽の下に潜り込ませて、  
一枚の木ぎれと同じように波間を漂っている、  
わずかの感覚さえさしはさまず、  
——自身の重ささえもない。  
太陽がでる頃になると、  
いつも風にのってふわりふわり、  
でも落ちてきたところは、やっぱり彼女の故郷、  
——いくらも特別の記憶なんてない、  
すべては変わらずたゆたう波ばかり。  
この記憶のできない海のうえで、  
彼女は啄ばみ、はばたき、鳴き、眠る  
・ ・ 生まれてずっと死に到るまで ・ ・  
愚かな、記憶の味わいさえ知らない  
かもめよ！  
おまえは宇宙のなかでこの上なく自由だ。

(1922年4月6日)

### 「記憶」

—  
人類は生きている、小羊が草原に駆け込んだのと同じように、  
意識することもなく色とりどりさまざまな草を腹にたくわえ、  
夜、囲いの中で横になると、またもぐもぐと反芻しはじめ、  
それらの甘さ、苦さ、酸っぱさ、辛さを感じ取る・ ・

人類もまた小羊と同じに愚かで  
いつも現時点では甘い、もしくは苦い記憶を味わうことができない！  
——あるいはこれら甘さ、辛さは変幻自在なのか？・・・  
どうしてわたしは寂寞の中で反芻し・・・  
どうして私の腹の中はこんなに苦い草ばかりなのだろう？

二

人類はまた画家と同じように、意識することもなく  
松や、青草や、小狐や、ねずみやを、  
彼の周囲の壁のうえに描く。  
後になってこれら小さな松や、小さな葉っぱや、小さな狐や、  
小さなねずみは、  
皆魔法にかかって、  
針で刺すように、妖怪のように眼をいからせて彼の主人に相對する。  
これはすなわち人類のそして自己の怨霊なのだ。

(1922年3月6日)

「将来の花園」

僕はとつてものびやかな草原に座って、  
ぼろ布のように折り畳んだ夢をゆっくりと開く；  
これこそが僕の仕事なんだ！  
僕は細心の注意を払って僕の心の中の  
より美しく、より新鮮で、より僕らにふさわしい図案を、  
その上に刺繍する；  
準備するんだ・・・いつか・・・  
これが子供たちの花園になるのだから！

(1922年5月3日)

「靴職人に問う」

靴屋さん、靴屋さん、何がそんなに忙しいの？  
——今じゃ地面はそこいらじゅうトゲばかりだろう、俺は鉄底の靴を作ってるんだ。  
靴屋さん、靴屋さん、何がそんなに悲しいの？  
——今じゃ地面はそこいらじゅう泥だらけだろう、俺は水の上の靴を作ってるんだ。  
靴屋さん、靴屋さん、どうしてそんなに泣いてるの？  
——この世はすべて腫れ物だらけだろう、いったいどうやって雲の上の靴を作ればいいんだ

い。

靴屋さん、靴屋さん、何がそんなに嬉しいの？  
——俺はもう夢の中の靴を作り上げたんだよ。

張さん、おいでよ！ 李さんもおいでよ！  
みんなそろって夢の中の靴をはこうじゃないか。

(1922年5月5日夜)

「小詩」

—

なにが夢で、なにが現実なのだろう？  
だがそれは人類の記憶の世界の隙間にすぎないのだ；  
こちらにいれば、必ずあちらから離れねばならない。

二

なにが生で、なにが死なのだろう？  
だがそれは人生の知覚上の制限にすぎないのだ；  
こちらにいれば、あちらのことを知ることはできない。

三

私たちが知っていて、さらに想像できるものはすべて夢；  
真実とは私たちが考えたこともない、知らないもの。

「予言者」

彼の予言はどこから来たのだろうか？  
それは、誰も知らない！  
だが彼は決して彼の予言の主宰者になることはできず、  
そればかりか、予言が現れたとたんに、  
彼自身でさえも恐れおののきはじめる。

(以上二篇、1922年5月6日)

\*以上、『将来之花園』(1922年8月、商務印書館刊)収録

「小詩」

どんな時に君は愉快で  
しかも全身が震えるの？  
僕の署名の郵便物の封を切るとき。  
どんな時に君は悩み苦しみ  
その上心がせつなくて涙を流すの？  
夢から醒めたばかりで、  
現実に触れた最初のとき。  
どんな時に君は心が穏やかですべてを忘れ去るの？  
夢の中。  
どんな時に君は生活の実感を得て  
さらに誇らしく思うの？  
夢の中。  
もうこれ以上聞かなくていい！  
夢の中で僕のすべてを手に入れ、  
僕のすべては夢の中にあるんだ。

(1921年2月27日『時事新報・学灯』原載)

「命」

悪魔が僕を幾重にも取り囲み、  
僕の気と血とをすべて抜き取ったとき、  
僕の親しい人たちはみな言う、僕はもう死んでしまったと。  
だが僕は憶えている、  
医者が針で僕の心臓を貫き通したとき、  
僕の魂はとつても安らかで、  
もう一つの場所で、  
とても甘く、とても濃厚な慰めを手に入れたことを。

(1921年8月16日)

「母への手紙」

僕がぼんやりととてもつらい気持ちで彼女を懐かしんでいたとき、  
思わず知らず一通の手紙を彼女にあてて書いていた。  
——彼女が一字も読めないことはわかっているのだけれど——  
私に接するあのいつもの眼差しで、一行一行

このあまりはっきりしない文字を見ていると、  
僕の涙はまるで火の粉のように、  
両頬をつたって灰色の便せんの上にこぼれ落ちた。

(1922年1月6日)

### 「運命」

前方は暗闇だ：  
どんなに聡明な人でも、  
彼の目前の一分間だって  
何か良くないことが起きないと断定する勇気はない。  
暗闇の中に立つのは運命  
——彼は死の、病の大斧を振るって、  
すべての人の生活と希望を断ち切ってしまう。

(1922年1月6日)

### 「追随者」

苦悶は一匹の長い蛇。  
僕が道を歩いているときにやつのしっぽが見え、  
草を刈っているときにやつの  
赤地に黒い斑点のある胴体が見え、  
眠っているときにやつの頭が見えた。  
  
悩みはまた赤い糸くずのような無数の小さな蛇で、  
田んぼや野原や村里にゴマ粒のようにあまねくはびこっている；  
目を開けるとやつがいて、  
目を閉じてもやっぱりやつだ。

ああ！  
やつはなにものでもない！  
やつはただ僕に恵みを施す追随者、  
やつはすこぶる勤勉で、  
一秒たりとも離れず僕についてくる。

(1922年1月15日『詩』1巻1号原載)



「詩興」

詩興は処女；  
彼女のあの麗しく均整のとれた姿態、  
靈妙な身のこなし、  
僕のすべてが彼女に夢中；——  
僕を泥のように酔わせ、  
狂ったように書かせる・・・  
僕は自分をまったくコントロールできなくなってしまった。  
手もしびれてしまい、  
眼もしよぼつき、  
ペンも鈍く干からびてしまい、  
紙も尽き、  
僕は敗北した素寒貧の愛者となってしまった。  
彼女はやはりダンス場を僕の心にしつらえると、  
尽きることのない華麗かつ複雑な舞踏曲が  
すでに始まりそれに続けて彼女も踊り出した！  
ああ！  
麗しくそして柔かな、雲なす繊細な黒髪が、  
僕の魂の周囲にひろがり、  
そのうえ僕の汗腺を突き抜けて、  
ひらひら無限の空間へと飛び散った。  
電光のようにひらめく白いスカートは、  
僕のひたいの隅でひるがえり、  
次第に僕をすっぽり覆ってしまった！  
ああ！  
この上なく美しい処女よ！  
僕は君の崇拜者、  
僕のあらゆるものは——もうすべて君にゆだねた。  
ああ！  
処女よ！  
僕をゆるしておくれ・・・  
僕は君のそのえもいわれぬ優しさに酔った吐息なんだ。——  
君を愛する敗北者だ！  
ああ！ 処女よ！  
僕をゆるしておくれ、僕は一人の敗北者だ！

(1922年2月15日『詩』1巻2号原載)

### 「小詩（一）」

この争って驕奢を追い求める世界の中で、  
にわか「民間へ行け」と高らかに声明する者がある。  
我々は彼らの厚意にとても感謝している。  
だが我々の兄弟たちは、  
もともと皆「民間から来た」のだ。

(1922年6月『小説月報』第14巻第6号)

### 「暗闇の中で」

暗闇のありか——  
探検家もまだ発見していない、  
宇宙の光も、蛍でさえも忘れてしまっている。  
そこにいて  
醜悪な亡霊が墓の奥深くに身をひそめているのと同じで、  
僕はけっして呻きもしなければ歌いもしない、  
おとなしくそこに横たわって  
ずっと長いこと僕の顔をさらけ出すことはしない。  
だが僕は絶え間なく想いかつ希望しているのだ、  
蛍が太陽に変身したその朝に、  
僕だって試しに  
光の領域に歩み寄ることを。

(『雪朝』(1922年6月刊)収録)

## 2 徐玉諾の小説

### 「良心」(処女作)

この小さな旅館の中に、一つだけ残っていたこの小さな部屋に泊まることになった。そのうえ幸運にも、私の真向かいの部屋に泊まっているのは羅さんだった、彼はこの町の有名な弁護士先生である。毎晩夕食後、彼はいつも“三砲台”印のタバコをくわえ、中庭を行ったり来たりする——それは恐らく毎日の“お勤め”なのだろう。時にはしばらく放心したようになり、と思うやまた急に力いっぱいタバコをふかすと、そこでやっとならばタバコを右手の人差し指と中指の間に挟みこみ、その顔には微かな笑顔がもれる。吐き出した煙が立ちこめて彼を覆ってしまわなければ、顔に刻まれた皺の深さがくっきりと浮かび上がる。

私はときどき彼の真似をして同じように行ったり来たりして見せる——タバコだけは真似できないが。すると彼のその微笑を湛えた顔にはしばしば何か言いたくてたまらないような表情が現れる。私が我慢できずに、「うまくいったのかい？ 友よ！」と話しかけると、かれはすぐ嬉しそうに、よどみなく答える、裁判に勝利したのだよと。この社会に彼のような人は欠かせないのかも知れないなど思いながら、私も思いつくままに言葉をかけて彼を祝福する。こうしてしばらくたつと、私たちは本当に友人となった。

ある日のこと、空がまだ明るいうちに、羅さんはゼイゼイと荒い息をさせながら帰ってきた。顔を真っ赤にして、静脈もふくれ上がり、彼のその酒臭い呼吸はすでに庭いっぱいにも充滿している。

「今夜、これからまだ贈り物が届くよ。魚や、鴨や、ハムや、それに“三砲台”も二十箱！」彼は笑いながら私に告げた。

「いったいどうしたというんだね？」

彼は冷ややかに笑いながら言った、「教えてやろう、友よ！ 二千元の成功報酬だ・・・、僕は法廷で一人の犯罪者を弁護して救ったのだ。」彼の心臓の鼓動は速度を早め、それに圧迫されるように彼の発する言葉もとぎれがちになる。

「結局のところ、その人間は罪を犯したのかい？ 無罪なら、むろん君の弁護も必要ないだろうが、もしも罪を犯したとすれば、誰が彼を無罪にできるものかい？」私は釈然としない思いでこう尋ねた。

すると彼は投げやりな調子で言った、「あいつは明らかに私利私欲のために人を殺めたのだ、だが法律の上で彼の無罪はすでに証明された。皆が認めたのだ、裁判官もサインをしたのだよ！」

「君の言うことは、全く納得できないよ！ その人間は自分の罪から逃れることはできない。彼はどうしたって良心の呵責から逃げおおせられないのだからね。」

わたしは厳しい口調で彼に向かってこう言い放ったのだが、あに凶らんや彼は態度をがらっと変え、冷淡にしかも怒気さえ帯びた調子でこう言うのだった。「良心だって！ そんなもの知らないな！ そいつには何か権威でもあるのかい？ ——法律と同じだって言うのかい？」彼の口調はますます切迫し高ぶってきた。

私は穏やかに言った、「もとよりそんなものはないよ——法律のように一項一項の規定があって、人を拘束できるわけじゃない。」

「それなら、僕は良心なんか持たない、良心なんか恐くない、良心がいったい僕をどうできるっていうんだい？」

私は続けて言った、「良心にはもちろん条件も、強制力もなければ、人を恐がらせることだってできやしない、だが彼は人の血液循環、呼吸、神経系統の中心にあって、一切を把握し、一切を支配できるのだ。誰もがみな心に良心を有している。良心は本来、その条件にもとるような行いを抑制するが、時にその管轄を逸脱し、人々の行為がその条件を犯すようなことがあれば、直ちにその力は人の身体のすみずみにまで及んできて、人体の各系統はいっせいに機能不全に陥ってしまう。そのスピードたるや電波すら及ばないほどだ！ そしてその呪縛から逃れる唯一の条件と

は、罪なきことのほかはないのだ！」

羅さんは静かになった、彼の法廷におけるかの鋭い論鋒はにわかにならなくなった。私の見る限り、彼は気拔けしたように頭を次第に垂れていったようだった、だが依然として彼のその喘ぎが止むことはなかった。

お互いにやはり中庭を行ったり来たりしていたが、周囲はすでに静まりかえっている。すると私はふと思い出した。幼い頃——田舎に住んでいた時に遭遇したある事件のことを。

ある時、最近火事を出したばかりの農家の東隣りのある家で、一人の子供が全くわけのわからない病を發して死にそうになっていた。集められた部屋じゅうの内科や外科の医者と知識に長けたあらゆる人士たちは、みな口をそろえてその子供は何の病気にもかかかっていないと宣言した。だが彼は目を見開き、足を突っ張り、ゼイゼイと激しく喘いで、死に神が目の前まで来ていることは誰の目にも明らかだった。彼の両親はただぼんやりと見つめるばかりで、ぼろぼろと流れ出る涙が二人にとって唯一の慰めとなっていた。とその時、突然子供は起き上がった。唇を震わせて、とぎれとぎれに言うには、「僕は・話すことが・あるんだ！」だがすぐに倒れ込む。とまたやにわに立ち上がり、大声で、「父さん！ 母さん！ 僕はもうすでに死んでしまった人間です。いまこの一時しか生きられません。はっきり言います、放火したのは僕です。僕が犯人なんだ……。」みなはあまりに驚いてあつけにとられるばかり。子供が続けて言うには、「一昨日僕が村のはずれで遊んでいた時、北風がとても激しかった。積んである枯れ草の山を見て思ったんだ。この強風の中、これを燃やしたらどんなに壯観だろうって。僕はすぐにポケットからマッチを取り出して火をつけた。猛烈な勢いで燃え広がり、そばの家屋にまで火がいまにも及びそうになったとき、すぐさまみながやって来て、『犯人は誰だ？ そいつを殺してしまえ！』と口々に叫んだんだ。僕は恐ろしかった。死刑にも値する罪を犯したことが怖かったんだ。その時、ちょうどそこにたきぎを拾いに来ていた小さな子供がいたんだ。僕はとっさに彼の手をつかむと、皆に向けてこいつが犯人だと言ったんだ。手のつけられないほどに怒っていた皆は、そのまま彼を袋だきで殺してしまった。その子供はいまにも死にそうというその時、二つの眼で僕を見た、その眼のおそろしさと言ったら……。いま僕はとても後悔してる、……今さら遅いのだけれど……彼の視線は僕の心をこなごなに砕いた。……父さん！ 母さん！ 僕は……」その声は次第に途切れがちになり、私が見ていると、部屋の皆は急に泣き出した、彼はもう死んでしまったと。

1920年12月4日

(原載 1921年1月7日『晨報副刊』)

#### (解説)

作家としての徐玉諾の経歴を辿る時、特筆すべきは、彼は他の多数の作家たちのように、認められるとすぐに都市に出て中央の文壇で筆を執るのではなく、自分自身河南の農村に居住したまま、一貫して目前の農村の実状を写し取ったことである。魯迅が小説集に編もうとした『晨報副

刊』上の徐玉諾の小説は、そのすべてが故郷河南の地で書かれ、はるばる投稿されて来た「郷土小説」であった。では、彼の生まれ育った河南は当時どのような状況にあったのだろうか。

数百頃数十頃の地主は、汝、魯、宝、郷の各県にいくらでもいた。多くの農民は耕す土地もなく、人々は生きていくことができなかつた。餓死することに甘んじない者は捨鉢になって土匪に走り、号令をかければ、往々にして数え切れない人間が寄り集まって来るほどだった。封建的統治者たちは自分たちの搾取制度を保護するために、民団を組織して匪賊討伐を図ったが、民団はまた往々にして土匪と結託した。…（中略）…こうして軍隊と匪賊がかわるがわる相互に転化し、その結果、河南西部に土匪が遍くはびこり、民は安心して生活することができないという状況をもたらした。

（「回憶 将生活与軍閥生活」 範龍章口述『河南文史資料選輯』第三輯  
1980年、河南人民出版社刊、74頁）

徐玉諾の故郷である当時の河南（魯山県）は軍閥の抗争、匪賊の災害が特に激しく、それに加えて重税に脅かされる農民の暮らしは凄絶を極めていた。そこはまさしく「生と死」の交錯する世界であった。「鍋腰爺さん」という小説では、主人公が次のように語る。

農夫たちは家屋を焼き払った火をすべて消し止め、また死体をすべて埋葬すると、一軒のボロ小屋の前に戻って来た。そのうち最も年長で、あだ名を鍋腰爺さんという者が、村人たちを慰めてこう言うのだった、「おまえたちこんなことで悲しみにくれちゃならねえ、おいらたちやこの世界に生きとちやいつもこうなんじゃ、・・（中略）…死とは何じゃ。生きとちゅうのはどういふことじゃろう。人はこの世にあつては大海の水と同じなんじゃ、氷に変わろうが、蒸気が変わろうが、虎の小便になつたとてやっぱ同じ物で、少しも損するこたあないんじゃよ。生きとちや死にまうよりなんもいふこたあねえ。このご時世じゃ人やつてくのも容易ではないからう。

（「鍋腰老公」 1921年8月26日『晨報副刊』）

ここには、匪賊に襲われ九人の兄弟をすべて殺された爺さんの言葉を通して、当時の河南農村の現実が語られている。1920年代前半に書かれた徐玉諾の21篇の小説中、18篇が「郷土」作品であるが、実にそのうちの14篇は悲惨な現実の中で死んでいった貧しい農民たちを描いたものであった。このような現実認識は当時の彼の作品を終始貫いて流れており、このため彼は文壇においてもその経歴とともにかなり異色視されていた傾向がある。「怪」詩人たる所以である。

徐玉諾文学の魅力、現代に通ずるその意義を伝えて行ければと考えている。